

地域畜産振興部門
(山口県)

平成22年度畜産経営改善のための支援・表彰事業(畜産経営技術等支援・表彰事業)

【畜産大賞 地域畜産振興部門】

事例推薦調書

提出事例の概要

1 事例タイトル

「ふるさと牧場」が試みる新しい農山村の結(ゆ)い
 ~ アグロフォレストリー(耕畜林複合)を里山再生の切り札に! ~

2 事例名称・所在地等

1 組織・グループ名	「ふるさと牧場」と支援グループ「こぶしの里牧場交遊会」(こぶしの会)		
2 代表者名	「ふるさと牧場」代表 <small>やまもと</small> 山本 <small>のぶゆき</small> 喜行		
3 設立年月	(こぶしの会) 平成 12 年 8 月	4 構成員数	15 名
5 所在地	〒 747 - 0102 山口県防府市大字久兼 410		
6 電話番号	0835 - 36 - 0337	7 FAX 番号	0835 - 36 - 0337
8 E-mail	mshim@d2.dion.ne.jp	9 URL	http://www.d2.dion.ne.jp/~mshim/index.htm

3 組織・グループの属性(を付してください)

行政関係機関	畜産関係団体	公社・公共牧場	協同組合
農事組合法人	任意組織	会社	その他 ()

4 コンクールへの出品経験

過去5年間以内にコンクール等への出品経験がある場合については必須記入。

コンクール名	主催団体・主催者	開催年月	受賞実績

審査委員名簿

(審査委員会名：山口県優良事例審査委員会)

氏名	所属・役職
委員長 深田 三夫	山口大学農学部生物資源環境科学科 教授
元永 利正	山口県農林総合技術センター技術指導室 主幹
三宅 俊三	山口県農林水産部畜産振興課 主査
嶋屋 晋	山口農林事務所畜産部 畜産振興課長
引田 久美子	山口県農林総合技術センター畜産技術部 専門研究員
富岡 郁夫	(社)山口県畜産振興協会 専務理事

推薦理由書

〔事例名称：「ふるさと牧場」が試みる新しい農山村の結(ゆ)い ~

アグロフォレストリー(耕畜林複合)を里山再生の切り札に！ ~ 〕

【本事例が審査委員会において評価されたポイント】

この半世紀、日本の農業は国際化という大きな流れのなか、農地の集積と大規模化が進められ、生産法人化など経営面での変革も加わり、労働および土地生産性が向上してきた。しかしながら、わが国の農地の多くは中山間部に位置しており、大規模化が困難な場所が多い。このような場所では人口の流出と高齢化が進み、農地や山林の荒廃、自然環境の悪化などを招き、ひいては農業、林業の衰退、食料自給率の低下を招く一因となっている。

山本喜行氏が長い間試行錯誤のうえ実践してきた、畜産、稲作、林業の複合経営(アグロフォレストリー)は、小規模なしかも条件不利な田畑や林地を抱え、出口が見えず荒れるのをただ傍観している、わが国の多くの意欲のある農民に希望を与え、農村再生のひとつのモデルになりうると確信する。

山本氏が本文「牛力(ぎゅうりょく)を仲立ちとする多面的機能」で述べているように、氏の長い間の経験、実践のなかから、生産の場、実地研究の場、実地研修の場、都市と農村交流の場のそれぞれにおいて牛や放牧を活用することが、低投入・省力化を実現し、さらには環境保全や景観保全を可能にし、人が集まることで情報が集まり、活動内容の発信が可能であることを氏は確信している。ただ林業や農業だけを目指すのではなく、牛力を仲立ちとした複合経営の実践こそが農村再生の道、というのが山本氏の農業観であり自然観の骨組みとなっている。放牧の場、稲作の場、林地内のそれぞれにあるものを相互に最大限に活用し、決して無理な投資をしないことが大切であると我々に教えている。経営面においても、稲作は単年度所得、畜産は2~3年周期の中期所得、林業は30年以上の長期所得と位置付け安定収入をはかっている。

山本氏の活動が評価されたポイントは以下の2点に集約できよう。

- (1) 「ふるさと牧場」のハード面の整備と、それを利用し活かす仕組み(ソフト面)を発案、実践する「こぶしの会」との連携がうまく機能しており、この二つは耕畜林複合経営の両輪となっている。この「こぶしの会」は、「ふるさと牧場」の協力者で発足したが、近隣地域の住民のなかにも関心をもつ人が増えてきた。
- (2) 将来の日本を担う子供たちの情操、環境教育の場、若い指導者の研修、育成の場として「ふるさと牧場」を提供、「こぶしの会」で発案、検討された教育、研修プログラムに基づいて実践している。単なる農業、林業体験ではなく、成果を参加者自身が体感することができるような内容に仕組まれている。

具体的な成果や活動は以下のとおりである。

- ・ 山口県発の水田放牧を率先して行い実践する中で、さらに隣接した林内で牛を放ち、林間放牧を実施して効果があることを確かめている。
- ・ 水田、林内の放牧によって、下草刈り作業の省力化だけではなく、林内では花の咲く木を残すことにより、林地をレクリエーションの場として提供している。さらに、牛が食しないシキミなどの商品化も行っている。
- ・ 農業、環境、自然に関心、興味をもつ若者とくに最近では若い女性がふえてきた。関心をやる気までに高める工夫と仕組みが必要であるが、ここでも山本氏の教育観が出ている。食育教育や環境教育の名の下に、さまざまなイベントが行われているが、主催者によって準備されたイベントでなく、参加者それぞれが考え、行動するプログラムが工夫されている。例えば、食の体験として、棚田米を野外炊飯し、参加者が食べる器や箸などは、それぞれが自作することなどである。

審査委員会名称 山口県優良事例審査委員会

審査委員長氏名 深田 三夫印

事例内容調書〔事例名称：「ふるさと牧場」〕

1 地域の概況

【地域（管内）の自然条件、主産業、農業・畜産の状況、畜産の地域産業に占める位置付け等】

参考となる統計資料等があれば添付すること。

1. 防府市の概要とふるさと牧場の位置

「ふるさと牧場」のある山口県防府市は、山口県の南部、瀬戸内海沿岸のほぼ中央に位置しており、一級河川佐波川が流れる防府平野に中央部がある。気候は温暖で、比較的雨の少ない瀬戸内海型気候である。

人口は116,597人、46,632戸を要している。

交通は、市内を東西に、国道2号線、山陽自動車道、JR山陽線が貫き、海には重要港湾があり、商工業が盛んで、臨海部には工場や物流基地が立ち並んでいる。

防府市の農業人口は5,091人、2,888戸（内自給的農家1,461戸、専業農家387戸、兼業農家1,040戸）となっている。

総土地面積188.59km²、耕地面積1,323ha、うち水田1,239ha、畑36ha、果樹48haとなっている。

平成18年度の農業産出額は約26億1千万円で、産出額が多い順に水稻（約11億円）、野菜（約6億円）、畜産（約4億円）、花（約3億円）となっている。

平成21年の畜産農家戸数は、肉用牛飼養農家16戸、酪農7戸、養豚1戸であり、飼養頭数は、肉用牛1,078頭、乳牛244頭となっている。

「ふるさと牧場」は市北部に位置する大平山（631m）の北側、佐波川の支流が流れ、棚田が広がる久兼地域集落の一番奥に位置する。久兼地域は、山口県棚田20選に選ばれた美しい景観が保全されているところであるが、農林業従事者も高齢化が進み、都市近郊型第2種兼業農家がすべてであり、専業農家は「ふるさと牧場」だけになっており、耕作できなくなった棚田も散見するようになってきた。

2. 防府市 生涯学習都市宣言

平成12年10月、防府市は生涯学習推進協議会を中心に、市民がどこでも誰でも関心のあることを学ぶことができる生涯学習都市宣言を行い、市内の在住のボランティアを登録し、多様な学習ができるようになっている。私は、県から指導農業士に認定され、農林業の指導を行うとともに生涯学習指導者としても登録しており、教育委員会や青年会議所主催の野外活動等の受入も協力している。



図 防府市の位置（防府市HPから）

2 地域畜産振興活動の内容

(1) 地域畜産振興につながる活動・取り組みの具体的な内容

1. ふるさと牧場経営のあゆみ

就農に至るまで

私は昭和20年に農家の長男として生まれ、大学卒業後、公務員10年、レストラン経営10年を経験しながら、自らが5代目となる山本家と所有する山林30㍊と棚田1.3㍊を有効に活用するための手法を模索していた。

社会経験の中で、自然を相手にする職業に就く夢を捨てられない気持ちから30歳でパワーショベル（ユンボ）を購入し、仕事の合間に林道の造成と植林を行ってきた。平成2年に林業と畜産、棚田米生産の複合経営に取り組み、専業経営となった。

牛の導入経緯

畜産はレストラン経営時に市場で仕入れた交雑種ヌレ子の育成販売から取り組んでいた。当時自家野菜を利用する一方、野菜屑を持ち帰り牛の餌にしていた。その後和牛妊娠牛を購入後、和牛繁殖と子牛育成に切り替えた。平成3年「山口県水田放牧事業」を活用し、放牧牛舎（6頭用）を建てたが、作業は一人でユンボを使い、林業部門の間伐材を活用した。和牛は血統を考慮して保留していく必要があることを学び、授精をお願いしていた畜産農家から優良血統の廃用牛を購入し、放牧により発情を復活させ、市場性のある精液で生まれた雌子牛の保留を積み重ね、現在自家産9頭の繁殖雌牛となっている。

林業の経緯と混牧林放牧

林業は、ユンボを活用し2km、10㍊に林道を伸ばしつつ、ヒノキを中心に植林を行った。

表1. 植林の推移

年次	面積	内容
H2～H3	1.6ha	ヒノキ（一部スギ）普通植林
H4～H8	7.4ha	ヒノキ（一部ケヤキ・クヌギ）マツクイムシ対策事業
合計	9.0ha	

植林後の雑草の繁茂は面積が広いだけに下草刈り作業は大変な重労働であった。そこで、春から秋にかけての下草刈りに牛の放牧をやってみると牛はヒノキをわずかししか食わず、雑草を舌草刈していった。林間放牧については、山口大学農学部がフィールド調査を実施し、放牧とヒノキの食害について、思っていたほど被害は少ないことを確認している。

稲作・畜産・林業の複合経営

繁殖和牛を始めると稲ワラが必要になり、しばらく休んでいた棚田（1.3ha）での稲作を復活させた。里山に連なる棚田は全て自分の名義ではなく他人名義の棚田もあるが、すでに農業は行っておらず私が管理しており、周年放牧地としている。結果、棚田での稲作と林業に畜産（牛力）を活用して組み合わせた複合経営を実践し、稲作は単年度所得、畜産は2～3年周期の中期所得、林業は30年以上の長期所得と位置付けている。

牛力をなかだちとした多面的機能

複合経営を持続可能な方法とするには畜産（牛力）を利用して稲作と林業を結びつけることが重要である。

- 牛と水田の関係；雑草利用（畦草・石垣の草）、糞尿（放牧時）や堆肥提供、稲わら利用、水田裏放牧、水田裏飼料作
- 牛と林業の関係；舌草刈、糞尿による施肥効果、牛道による作業道づくり、間伐材牛舎、被陰効果、水飲み場

いずれも牛力が仲立ちとなっている。持続的な複合経営は、さらに多面的機能を発揮する。

多面的機能とは、生産の場、実地研究の場、実地研修の場、都市と農村交流の場である。放牧を活用することが低投入・省力化を実現するとともに、環境保全や景観保



棚田に放牧した牛と母屋

持を可能とし、人が集まることで情報が集まり、さらに活動内容を発信することが可能となる。

2. 研究の場から研修の場へ（地域ボランティアも研修の一部）

「ふるさと牧場」が実践する耕畜林複合経営は、アグロフォレストリーの実践としても知られはじめ、山口大学農学部小澤教授（当時）が植林地放牧の实地研究を実施したこともあり、県内外から多くの畜産関係者が訪れるようになった。

また、各大学の学生は視察だけではなく数日間宿泊しての研修を希望してくるようになり、可能な限り受入れを行ってきた。

表2. 大学生の受入れ（後日取りまとめ報告書が届いたもの）

年次	大学	人数他
H15.3.12～18	広島大学教育学部	2名
H15.7.4～6 8.13～17	東京農業大学	2名
H15.8.22～29	広島大学生物生産学部	3名
H15.9.12～15	広島大学生物生産学部	2名
H16.3.10～18	東京農業大学	6名～10名
H18.9.20～25	広島大学生物生産学部	2名
H19.3.22～27	近畿大学農学部 広島大学生物生産学部	2名 1名

この他にも山口大学農学部・文学部、武庫川女子大学、岩手大学農学部など、なぜか女子学生が多く、元気もある。農林業体験研修は基本的に周年いつでも可能であり、季節の作業を体験するとともに、山を歩きながら、ふるさと牧場の経営方針を紹介してきた。彼女たちは、数日間宿泊し、多いときは10名近い学生が一度に研修を行ったこともあるが、すべてをここだけでの研修で終わるのではなく、集落にあるお寺での清掃作業や一人暮らしの高齢者のお宅へ出向いての庭の草取りと話し相手、さらには夏休みに研修に来た学生には集落の盆踊りへ参加してもらうなど、地域の方への貢献も研修の重要なメニューとしている。

3. 牛が管理するレクリエーションの場

植林地でも花の咲く木は残す

私は、植林を行う前の雑木伐採において、辛夷（こぶし）、山躑躅（ヤマツツジ）、椿、ツルアジサイなどの花を咲かせる木をできるだけ残し、ヒノキとの混生となる植林を行ってきた。当時、植林の補助事業を受ける際には行政担当者の理解を得られないこともあったが、林業だけを目指すのではないことを説明し、理解をいただいた。その結果、数年後からは、花の咲く鑑賞木が混じる景観が広がりはじめ、心安らぐ空間となっている。林道も重機により広く整備し、排水もきちんとしている。

裸地化対策はノシバ

林道面積は1.5畝にもなるが、土質は真砂土であり、雨のたびに土砂が流出していた。必要な所はコンクリートで固めたが、全てをする訳には行かない。そこで、学生の研修時など人手がある時を活用して、県畜産試験場から斡旋のあったノシバを数年かけて植えていった。ノシバは牛の嗜好性が良いものの、根株まで食べることはなく牛の放牧により数年で広がり、夏でも背の高い雑草が無く歩きやすいトレッキングコースとなっている。

美しい景観を開放

混牧林を継続してできた景観を見て、多くの方が立ち寄るようになった。ふるさと牧場は防府市の観光地大平山の裏手の市道（現在林道）沿いにあるため、一般市民、特に小さい子を連れた親子が「牛を見せてください」と立ち寄りたり、山を散策するなど、市街地では見ること



ふるさと牧場の全景

光地大平山の裏手の市道（現在林道）沿いにあるため、一般市民、特に小さい子を連れた親子が「牛を見せてください」と立ち寄りたり、山を散策するなど、市街地では見ること

の少なくなった牛とのふれあいも求める人も多くなっていた。

4. こぶしの里牧場交遊会の発足

きっかけはコブシの花見会

里山の景色は四季を通じて変化するが、特に4月上旬のコブシが満開の年は山一面が白くなるほどであり、毎年バーベキューをしながら花見会を行い、参加者も100名近くになることもあった。毎年参加している有志の中から「ふるさと牧場」の取り組みを支援しようという声があがり、平成12年8月、「こぶしの里牧場交遊会」(以降「こぶしの会」)が発足した。呼びかけは植林地での放牧調査研究を行っていた山口大学教授と農林事務所職員であるが、地元の方、畜産農家、関係機関・団体職員、大学・高校の先生、サラリーマンなど、多様な賛同者が集まり、発足の会では、アグロフォレストリーによる里山保全の理解とPR、実践者の育成、グリーン・ツーリズムの実践など、これから過疎化が進む農山村で求められる活動内容を夜遅くまで話し合った。

継続性するための遊び心が生んだ茅葺交流ハウス

具体的にどうするかを考えると、どれも一朝一夕に出来るものではなく、継続することが基本であり、会員も遊びを交えて楽しめる技術習得や交流の場になることを基本とした。

さらに、私の家ではなく、会員が気軽に集う場所・交流ハウスも必要であり、里山の間伐材を提供することとした。屋根は茅葺きで囲炉裏も・・・と提案はたくさんあったが、ここで確保できない茅は大平山や近隣の耕作放棄地へ出かけみんなで集めることとした。安易に補助事業に頼るのではなく、会員の技術向上にもなることを踏まえて、できるだけ自力で建築することを決めた。夢は大きかったが、間伐材を1本倒して、皮を剥くだけでも1日のイベントになるほど時間と労力がかかることとなった。この時も私の林業技術と重機が大いに役立った。



建築途中の茅葺交流ハウス

職人から学ぶ伝統技術(大工、左官、茅葺)

職人のボランティア依頼は難しかったが、交流ハウスの主旨を説明して、柱の設置や土壁の竹小舞技術など、必要なところは地元の大工や左官屋さんに教えてもらった。茅葺きについては、隣町の80歳の職人に15日間指導をお願いし、片屋根の作業を通じて茅葺き技術を教えてもらった。茅葺は数種類の簡単な道具を使い、竹とワラ縄だけで葺いていく作業であるが、縄を縛る男結びの繰り返しは辛い作業であったが、会員も次第にできるようになり、残りの屋根は自分達だけで葺くことができた。作業の途中で茅が無くなり、急遽近郊の耕作放棄地の茅を刈に行くこともしばしばであった。会員は自分の勤めがあるため、週末限定の作業であり進捗状況はゆっくりしたものとなり、結局、床と囲炉裏を設置し、集える場となったのは平成21年であった。

いろいろな職種の会員

会員数は、当初は40名の登録があったが、作業まで継続する会員は限定される。いろいろな職種の方が入れ替わりつつ、作業が継続していったのが現実である。しかし、一度でも作業に参加してくれたことでも嬉しいことであり、何かの機会にまた訪れることを願っている。

現在中心的に活動しているのは、団体職員、公務員、鉄工所経営者、建築会社経営者、陶芸家、地域の水田を借りて稲作や野菜作りをしている農家であり、もちろん私も妻も会員である。常に参加している方々が増えていくことは嬉しいことだが、何かの折に連携できる方も貴重な会員であり、県外ではあるが、放牧関係の研究者、元大学教授、さらには岡山県で林間放牧を開始した元公務員の女性もいる。

5. 「ふるさと牧場」と「こぶしの会」の連携による活動の広がり

ふれあい体験交流活動(牛とのふれあい、野外調理に竹加工)

HP「ふるさと牧場」で「こぶしの会」の活動記録を見ると、作業中心に見えるが、「ふるさと牧場」へ依頼のある体験活動のサポーター役としても経験を重ねている。

平成17年からは、ふれあい体験交流受入牧場として、山口県畜産振興協会と連携し毎年「里山で牛とのふれあい体験ツアー」を行っている。

一般公募により毎回数組の小学生親子が参加している。内容は、私の飼っている和牛登録証を使った和牛のお話から子牛とのふれあい、測尺、さらには鼻紋採取体験などを協会登録担当者が行うとともに、林間放牧されている子牛の母牛を探す体験も好評である。食の体験としては、棚田米を野外炊飯し、参加者が食べる器や箸は竹を加工して作るなど、親子で汗をかかないと食べられない工夫もしてある。さらに、ドラム缶風呂や宿泊体験など、他ではできない体験を提供している。



親子ふれあい体験 里山散策

親子で一年を通じた農作業体験！「田んぼの学校」開校と意外な効果

平成18年からは、会員の提案により「田んぼの学校佐波川」を開校している。内容は、小学生親子に棚田でもち米を作る体験を組み、塩水選、籾蒔きから始まり、田植え、夏の草取り、稲刈り、脱穀、臼挽き、そして12月の恒例イベントに定着した餅つきで1年の体験を終了する継続参加型の体験受入を行っている。当初は一組の参加であったが、平成22年の籾蒔き作業時には11組と増えている。参加者の口コミやふれあい体験ツアー参加者がリピーターとなるケースも多くなっている。

・意外な効果その1（会員が棚田で生産開始）

田んぼの学校活動でのサポート経験を踏まえて、週末だけの作業ではあるが、自分が管理する棚田を決めて、お米を自ら生産する会員が出てきた。日々の水管理や肥料代、田植機・バインダーや燃料は「ふるさと牧場」が負担しているため、生産したお米であっても同じ値段で玄米を販売している。「ふるさと牧場」としては多少とも手間が省けたとして、その分の差額を計算し、「こぶしの会」へ寄付している。まだ3名の取り組みであるが、生産と消費を直結させるシステムとしての先駆的に挑戦している。

・意外な効果その2（参加者も支援）

田んぼの学校等へ毎回参加する親子は、子供たちが里山を自由に遊びまわり、服を泥だらけにしてイモリを捕まえる時間と空間に同じような価値観を持っており、嬉しく思っているが、さらに、参加するだけから活動を始めるお母さんが出始めている。ここでの作業体験参加は弁当持参であるが、料理上手なお母さんが手作りのお菓子を参加者へ披露することから発展し、子供たちが遊んでいる間の料理教室を実践している。平成21年12月の餅つきイベントでは、クリスマス用ヘキセンハウス（お菓子の家）づくり教室を行い、平成22年3月の椎茸の菌打ち体験の時は、近くの酪農家から生乳を分けていただいてチーズづくり教室を行った。その多才なお母さんは、7月には里山の野草を使っ



参加者が企画したお菓子作り

た草木染め教室も行い、ほぼ固定してきたメンバーたちは、上手に仕上がれば「ふるさと牧場」の特産品になることも目指している。

6. 多様な情報発信

活動内容は広くPR（HP、情報誌、マスコミも）

「ふるさと牧場」と「こぶしの会」が行う活動内容は、「こぶしの会」事務局が管理するHP「ふるさと牧場」や田んぼの学校会員の「久兼の里」、さらに、参加者のブログなどからも紹介をしているようである。

私からの情報発信は、中央畜産会に投稿した「21世紀に向けた農業革命」（畜産経営情報）や土地利用型畜産の再生・定着を提唱していた農林業ジャーナリスト増井和夫氏（故人）

の取材を受けての山口県草地研究会創立30周年記念誌へも投稿の他、多様な雑誌の取材、テレビ等のメディア、各地からの講演依頼を活用して、自分の哲学も語りながらアグロフォレストリーを紹介し、「こぶしの会」と連携した活動も紹介した。バラエティー番組であっても、タレントさんをも煙に巻きつつ、アグロフォレストリーを紹介していただいた（別添資料6）。さらに、平成15年から開催されている「山口県むらまち元気交流会」や全国放牧サミットや棚田サミットなどへも積極的に参加し、情報交換にも努めている。

大学で非常勤講師（学生の意外な反応）

さらに、数年前から山口大学非常勤講師も引き受け、毎年5月に全学部1年生を対象とした講義を1回引き受けている。平成22年5月18日には、「環境と地域共生」をテーマに「山口県の林業」を中心に講義を行った。今回も100名以上の学生が対象であり、一人での語りも辛くなってきたので、「こぶしの会」会員と協力し、私が林間放牧や林業の話を語り、会員は「ふるさと牧場」で展開している各種活動を紹介した。大学1年生から想像すると、受験勉強や部活しか経験の無い学生に林間放牧や里山体験が理解できたのか不安でもあったが、後日学生のレポートの採点を行い、多くの学生が自分の出身地の山林の現状など考えたこともなかったことに気づき、行政支援や森林ボランティアなどの取り組みをHPで知ったようであった。さらに、「自由な時間がある学生の時に、農山村体験をしてみたい」という感想を書いた学生がかなりいたことは、現在の農林業の課題である過疎化対策として、地域からの情報提供がまだまだ不足していることを実感するとともに、小学校から大学までの教育過程において、地域の一次産業を体験する機会がもっと必要であることを感じている。



山口ケーブルテレビの取材

(2) 当該事例の活動目的と背景 【活動を試みた動機、背景、目的等】

取り組み前の状況を数値的な指標（戸数、人数、面積、金額等活動の受益者の経営内容を表すもの）として表現することが可能な場合はなるべく盛り込むこと。

1. 「ふるさと牧場」の経営方針

心にゆとりのある経営とは

私たちは現在夫婦二人暮らしであり、農畜林複合経営による収入が基本である。専業経営となった当時から、妻には勤めを継続してもらい、私は牛力を活用するアグロフォレストリーにより体に負担を掛けず、仕事に追われない手法を実践し、余裕のある暮らしと老後の年金がしっかり確保できることを基本としてきた。若い時に、サラリーマンの傍らユンボで林道作業をするときは、昼ごはんもそこそこに道を築いていったが、体力に任せて無茶をすると人生の後半にお釣りをもらっては何をしたのかわからなくなる。

アグロフォレストリー実践の生活収入の内訳（林業副産物は牛が育てた花シバ）



植林地放牧と花シバ

・子牛販売収入；私の飼育方法は林間放牧に適する牛作りを基本としており、山に登れる身軽な牛の体型を理想としている。販売する子牛も粗飼料主体の育成方法である。年間4～6頭の販売で市場平均よりは下回る価格であるが、収入の主体である。

・副産物収入；これまで2番目に多い収入は米売上であったが、ここ数年は林業部門である。ヒノキはまだ販売できないが、毎年注文が増えているのは、植林地の広がっている花シバ（シキミ）である。植えた訳ではないので正確には林業副産物であるが、これは、中国地域においては、正月、盆、春と秋の彼岸の墓参りの際に花と供えて供養をすることが

ら、年4回の安定した収入源となっている。花シバは毒性があり、牛は花シバを避けて下草や巻き蔓を食べ、施肥まで提供してくれるため、その面積は年々広がっている。

・米販売収入；米は固定客への販売が中心である。苗床づくりから行い、除草剤と肥料を利用する程度の栽培方法であり、はぜ掛けによる天日干しを基本としている。従って、機械装備も2条田植え機、2条バインダー、ハーベスターなど最小におさえ全て中古である。田んぼの土づくりは、牛が水田裏作に放牧される棚田以外は、牛舎のボロだしを週に数回、一回に一輪車1台分を運び、薄く散布する程度である。

・間伐材は材料代；植林をしたヒノキによる収入はかなり先のことになるが、間伐材が交流ハウスの骨組みとなり牛舎の柱にもなることから間接的に畜産部門や活動のために貢献している。

林間放牧の手法（牛は山仕事の友。自らも余裕）

植林地の管理は放牧牛が下草刈を継続していることから、私の作業は茨の除去など最小限で済ませることができ、牛を見る傍ら枝打ちや間伐作業も安心して継続することができる。これまで、一人で山仕事を継続してこられたのは、人が入りやすい里山であったこともあるが、牛と一緒に山を歩きながらの枝打ち作業だったことは心強いものであった。

私の放牧方法は、周年放牧を基本とし、離乳（3ヶ月）後の母牛は、放牧牛舎へ移り、ここでは朝と夕に飼料給与（稲ワラ、乾草、ふすま、トウモロコシ程度）を行い、夕方には必ず牛舎へ帰らせ行動範囲をセーブするとともに、発情発見、人工授精、健康管理を確実にしている。



冬の堆肥散布

牛力を活用した耕畜林複合経営は、結果的に無駄の少ない合理的な手法となっており、大きな投資も必要なく返済に追われることのない心身ともに健全な経営となり、学生の受入や「こぶしの会」との連携活動をする余裕を持っている。

表3.「ふるさと牧場」畜産部門の基礎数値

項目	H 1 9	H 2 0	H 2 1
成雌牛飼養頭数	9.1頭(内未経産2.1頭)	7.8頭(同1.1頭)	9.8頭(同2.6頭)
分娩頭数	8頭	3頭	9頭
出荷頭数	4頭	6頭	4頭
平均分娩間隔	14.3カ月	11.3カ月	14.1カ月

2. 個人での受入れから「こぶしの会」との連携による多様な受入と対外活動へ

牧場に人を受け入れるきっかけ

「ふるさと牧場」には、ドライブの途中で牧場の看板を見て立ち寄る若者や親子連れが多い。嬉しそうにイモリを捕まえている子どもを見ているお母さんから「よそでは畔が崩れるから田んぼに近寄るな!と叱られた」と聞き、同じ農業者としてがっかりするとともに自分は多くの消費者を受入れるべきだと決めた。そのために防府市生涯学習ボランティアへも登録し、農業体験の受入れなども積極的に行ってきた。

会員との関係(共に学び、技術向上を高める連携)

「こぶしの会」メンバーは多様な職業であり、多くは消費者側となるが、「ふるさと牧場」での活動を通じて、多くの語らいから私の思いを理解し、現在の農山村が抱える課題を実感し、その背景となっている「人の空洞化」の解決方法を議論することがある。私が実践しているアグロフォレストリーを基本とすれば、農山村での暮らしも可能であるし、将来、希望する人の受入方法も検討している。

「ふるさと牧場」の手法や技術に加えて、農山村の生活維持に必要な伝統技術も楽しみながら学ぶことで、私も会員も生産活動から暮らしの維持に必要な多くの技術を身につけてきており、お互いが良好な連携になっている。さらに、外部からの作業体験、体験学習の依頼も引き受けることを可能としている。常に活動している会員や親子は限定されてはいるが、人が集うことで、いろいろな才能や特技を持つ人が新たに参加するなど、人を活かす場を維持することで多様な受入と対外活動の広がりを可能にしている。まずは、久兼地域において活動の本質を認知してもらい、関心を持ってもらうことも重要な目的と考えている。

具体的な連携(情報発信、技術向上、役割分担、研修受入意志確認)

「ふるさと牧場」と「こぶしの会」の良好な関係とは、例えば、私はパソコンを使えないが会員がHPでの活動状況を更新しているし、講演依頼の対応についても、私が思いを下書きするだけで、会員が画像を使った資料やパワーポイントを作成してくれるので聞く人に解りやすく話ができる。

私は石垣を組む技術から棚田管理技術、林間放牧の手法など多種の技術を全て教えている。第3者から学ぶ茅葺技術などの伝統技術については、「ふるさと牧場」の経営だけであれば縁がなかったであろうが、「こぶしの会」活動があるから必要となった出会いであり、職人の技を作業の中で一緒に学び、共通の技術習得となることはお互いの成長となっている。

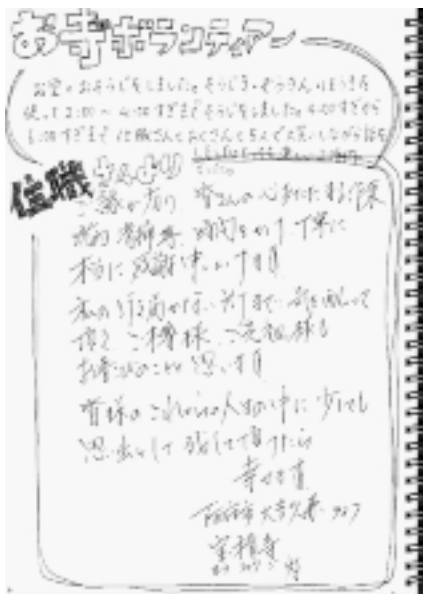
親子ふれあい体験においても、それぞれの持場で、和牛の説明や薪割り指導や竹加工指導が始まるように自然と役割分担ができており、多才なお母さんが、ここでやるから面白い野外料理などを次々と考えることで受入れる体験メニューも増えている。

学生の研修受入れは、HPを見てメールで依頼してくることが多いようであるが、「こぶしの会」事務局が数回メールのやりとりをして意志を確認している。それから学生が直接私に電話をしてくることで研修が決定する。さらに、車を持たない場合は、JRとバスで来ることを条件としている。バスは1日2本久兼までの路線があるが、廃線にならないようささやかな貢献をしているつもりである。

研修を終えた学生達が送ってきた実習の記録のほんの一部を紹介している。ここで学んだことが良くまとめられており、研修のときには直接聞けなかった感想も書いてあり、私

の宝であり、受入れる側にとって目的達成を知る貴重な資料である。

中には観光牧場と勘違いして遊びに近い感覚で出迎えまで期待する学生もあり、ある程度学生の研修意欲を「こぶしの会」事務局で確認する役割も果たしている。



学生たちが送ってきた記録

3. 牛力を基本とした農山村に必要な新しい結いとは・・・

農山村の課題、人の空洞化を埋める手段

今、農山村が抱える高齢化、過疎化、耕作放棄地や山林荒廃、さらには限界集落・・・、これは、農山村に起きている人の空洞化の結果である。日本農業の背景を考えると、これまで日本経済の余力で資材を輸入し、専門化、大規模化を図ってきたと言える。しかし、経済力の強さは、一方で農産物を安価に入手できる流通システムをも構築し、販売価格の低迷にもなっている。大規模化を図ることができない農山村では、販売価格低迷のダメージだけを受けており、ここでの所得向上を絶望的にしている。

「ふるさと牧場」では、黒毛和牛を畜力として用い、人の手や機械化を最小限に抑えながら里山を守っている。稲作・耕作（アグリカルチャー）と山林（フォレスト）を組み合わせた「アグロフォレストリー」の実践に牛の放牧は必須である。常に5から7頭の牛たちが約10㍓の植林地を歩き続け、草をはみ、樹木も花木も大きく育ち、棚田へも有機質肥料を提供している。その結果、耕作部門、畜産部門、林業部門それぞれを省力化しており、販売額が低くとも出ていくお金も抑えている。しかも、すばらしい景観を作り上げている。このような空間があるからこそ農林業の多面的機能を十分発揮できる基盤ができ、お金には変えられない価値を生み出している。

具体的には、これまで紹介してきた活動の結果生まれた人の交流である。週末だけでも「ふるさと牧場」へ通う会員やお母さん達の中からも生産活動へ参加したり、簡単な加工への取り組みも芽生えたことは、まさに、人の空洞化を埋める新しい手段といえる。

お金では計れない体験の価値、さらに定住者も

平成22年の夏休みに子供たちを数日間ホームステイさせてもらう代わりに、秋の稲刈り後に牛用の稲わらをお母さんたちが集める計画がある。1日いくらで受入れるのではなく、子供たちが得た体験の価値を作業労働で払うシステムは、消費者の中心でもある母親に農作業体験をしてもらう絶好の機会となる。子どもたち中心の体験の場から、親も農作業体験を通じて棚田米等の生産過程や稲ワラ収集が牛の飼料確保につながることを学ぶことで、本当の農産物の価値を理解し、共同作業にまで段階的に発展すると考えている。

ここに定住を希望する若者も現れている。若くして結婚し、妻子もあるため、働きながら週末に通ってくる。将来は、まだ20㍓ある山林の植林や里山に近い耕作放棄棚田への放牧拡大により頭数を増やすことも可能であり、「こぶしの会」とともに住居確保から収入確保を目指すことも模索している。



親子でサツマイモ畑の草取り作業

(3) 活動の成果

【活動による成果、目的の達成状況、さらに地域にもたらした二次的な影響等】

成果を表す数値的な指標（戸数、人数、面積、金額等活動の受益者の経営内容を表すもの）として表現することが可能な場合はなるべく盛り込むこと。

1. 混牧林放牧が里山や棚田にもたらす効果と実証

混牧林放牧を生かす工夫

牛力を活用した植林地や棚田の管理については、これまでの工夫と成果を整理してみた。

表4. 「ふるさと牧場」での混牧林放牧

場所	工夫	成果
林道全般	ノシバ植付け	土壌流出防止、緑の絨毯
竹林に接する林道	筍を食べる	竹の繁茂防止
植林地全般		雑草繁茂防止、花シバ繁茂
間伐の必要な植林地	列状（等高線）間伐	ノシバ利用によりトレッキングコースへ
食害のある植林地	ノシバ植付け	ノシバ草地化
牛道	ノシバ植付け	裸地化防止
棚田（水田裏放牧）	畔幅を1m	糞尿散布、畔のモグラ防止、石垣草防除
棚田（周年放牧）	ノシバ植付け	緑の絨毯、石垣草防除

一方、牛力では解決できない実生の松や茨、臭いの強い雑草の繁茂は放牧牛の確認のついでに行える程度の作業であり、長い年月を重ねた結果、やすらぎを感じる空間を拡大しつつ里山全体の保全能力も高めている。

100年に一度の豪雨にも耐えた保全力

平成21年7月21日に防府市を襲った豪雨では各地で広範囲の土砂崩れが発生し、多数の犠牲者を出した。土石流に襲われた老人ホームはまさに、私の山の裏に位置している。おそらく同じ量の雨が降ったと考えられ、ここの林道も川となったが、市道から母屋への道だけは崩さないよう夫婦で悪戦苦闘した。

沢沿いの渓谷の一部や交流ハウスへ上がる道、棚田の一部が崩れ、大きな石や流木が流れて出し、しばらくはコンボでの復旧作業に追われた。しかし、いずれも一部の崩壊に留まった。特に、当日川へと様相を変えた林道では、牛の放牧により広がっていたノシバが絶大な効果を発揮し、林道のところどころに施工してあったコンクリートと同じ強度を保っていたと考えられる。専門家による検証を受けたわけではないが、事実としてノシバを活用した林間放牧の効果を知ることとなった貴重な経験であった。



豪雨後沢沿いの崩壊

崩壊部分については、夏から復旧に取りかかった。私がコンボを扱い、会員が一人でもサポートに来れば作業を行い、11月には交流ハウスへの坂道を復旧することができた。参加した会員も濁流で流れてきた大きな石を石垣に活用する技術を体験する良い機会となった。

崩壊部分については、夏から復旧に取りかかった。私がコンボを扱い、会員が一人でもサポートに来れば作業を行い、11月には交流ハウスへの坂道を復旧することができた。参加した会員も濁流で流れてきた大きな石を石垣に活用する技術を体験する良い機会となった。

2. 継続的な体験と遊びで封印された子どもたちの能力を発揮

参加親子の変化（子供が仲良く、親も連携）

継続的な体験である田んぼの学校には、年々参加親子が増加している。子どもたちの年齢も年長さんから6年生まで幅広く、お母さんやお父さんもここで何度か顔を合わせるうちに交流が始まっている。

まず、子どもたちが仲良くなり、リーダー的な子を中心にグループで行動するようになる。共同でイモリやカエルを捕まえたり、川遊びや里山探検、交流ハウスでのかくれんぼなど、次々と遊びを作っている。初めはなかなか行動を共にできない子もいつの間にか一緒に遊ぶようになり、放牧牛を触りに行くこともある。さらに、野外調理を手伝ったり、薪割りや火おこしにも挑戦するようになる。最近は、たくさん汗をかいた後に、ドラム缶

風呂へ入ることが大きな楽しみとなっている。

子どもの能力発揮（仕事を与える必要性）

平成22年夏休みの子どもたちだけのホームステイでは、子供でも我が家のお手伝いをすることを基本とした。高校1年生をリーダーに小学校低学年が多い参加メンバーであるが、調理の手伝いや五右衛門風呂の焚き付け、昼に刈り取った雑草を集めて牛に与える作業、そして後かたづけも自分で行う。家では食器洗い位しかやったことがないそうであるが、やり方を覚えると生き生きと動き回っており、時間は掛かっても必要な仕事をこなしている。お母さんたちも子どもの能力を活かす場が必要であることを再度実感している。

グループでの体系的な学び

平成20年から毎年1回体験にやってくる活動グループがある。周南市の「福川こどもクラブ」である。幼稚園を経営している大野夫妻が地域の小学生を公募し、年間を通じて月1回の野外体験活動をしているグループである。このグループは山口大学のボランティアも受入れて活動しており、必ず年間のテーマを決め、体験計画を作り、体験後には必ずふりかえりを実践し、やりっぱなしの体験にならないように工夫している。ここ数年、林業をテーマに「ふるさと牧場」での野外体験を行い、間伐体験、林道整備（実生で広がる松の伐採）や植林（楓）を通じて林業の意味を理解している。「松の伐採を一日やりたい！」と感想を書いた子供は、自由に木を切る経験が無かっただけかもしれないが、体験を通じて子どもたちが日頃出す機会のない能力を引き出す良い機会となっていることは間違いない。

3. 活動継続の実績により補助事業も活用し受入体制強化

活動実績から県補助事業利用へ

「ふるさと牧場」での各種活動の継続と情報発信により、行政サイドから補助事業活用の打診があった。平成21年度山口県棚田保全活動支援事業は、棚田を活用している集団に対し、必要な材料代を補助するものであり、おかげで、野外調理場、炊事場、ドラム缶風呂釜、茅葺き交流ハウス周辺の排水路を整備することができた。事業実施に当たり、「こぶしの会」規約も整え、会費徴収や交流ハウス使用規約も順次決め、仲良しグループから集団へ進化している。整備ができた後、平成22年5月に「防府市レオクラブ」から「竹の箸づくりとそば打ち体験」、山陽小野田市の活動グループから「タケノコ掘り体験」の依頼があり、一緒に交流することができた。

炊事場やドラム缶風呂が利用できることから、夏休みには会員親子の宿泊体験を実施し、小学生10名とお母さん2名が夜に出てくる虫と格闘しながら、楽しい一夜を過ごす体験ができた。

中学校からの体験学習希望を教育と農林の連携へ

平成23年度、市内の中学校から農作業と宿泊型体験学習希望が来ている。中学生はそろそろ将来の職業も意識する年代であり、防府市の農林業体験を通じて理解することは、重要であるが、「ふるさと牧場」に丸投げではなく、防府市農林課等とも連携を取るなかで、体験内容を検討するよう投げ返している。多忙な先生には難題かもしれないが、教育機関との連携は地域農林業のためのキーワードとなり、そのために体験学習に理解のある先生が増える期待しているし、農林関係の担当者にも、教育委員会もここでの活動内容と子供



ホームステイする子どもたち



福川こどもクラブの松伐採体験



夏休み体験の様子

たちへの効果をしっかり理解してもらいたいと願っている。

3. 久兼地域全体へ認知から全国への波及効果

「こぶしの会」の地域貢献（道の保全、棚田20選、中山間直支継続）

「ふるさと牧場」は久兼地域の最も奥に位置しており、県道から車1台が通れるほどの市道を遡って辿り着くことができる。この市道は山沿いにあるため、竹や木々の枝が道へせり出している。地域自治会が実施する道沿いの草刈り参加者だけではすでに管理が困難になっていたが、自治会と話をし「こぶしの会」会員と私が夏前にせり出した竹や枝を刈り払い、快適な道となった。今後、毎年継続を予定している。

また、平成22年3月に山口県は「やまぐちの棚田20選」を選定し、久兼の棚田も選定された。平成22年度に認定地域へ看板が設置されるが、その表記は「久兼上地区」（こぶしの里牧場交遊会）となっている。棚田は生産条件の視点から見ると採算が取れるものではないが、棚田の評価は、上質な米を生産し、多面的な機能を有する場であるとして、生産性以外の重要性がようやく認められつつあると感じている。今後、保全された棚田をPRするための各種活動が求められる。まさに、田んぼの学校等の継続的な交流活動が伴うことで20選に認められたものと受け止めている。この評価は、久兼地域の棚田米ブランド化へ波及する可能性もあり、地域全体への取組につながる一つのきっかけになればと考えている。

久兼上地区においては、中山間地域直接支払い制度の3期目も取り組むこととしている。「こぶしの会」も参加することで、今後増えてくる山際の耕作放棄地対策には、山口型放牧を活用した移動放牧による景観維持を広げていくとともに、若手会員も重機を扱い、崩壊した棚田の整備や条件の良い農地確保により、景観を保持した農業生産基盤を固めていくこととしている。

会員から林間放牧への取り組みも（一人の取り組みから各地の農山村へ）

「こぶしの会」発足の前からここへ研修に来ていた広島在住の女性会員がいた。毎年一回程度遊びに来ていたが、その内結婚の知らせや出産の知らせが届くとともに、山林を購入して牛を飼いたいという相談をしてくるようになった。私もできることはしたいと思いつつ県外では、アドバイスくらいしか出来なかったが、私が林間放牧の講演をした、岡山県新見市に家族で移り住み、念願の放牧を開始した。

一度「こぶしの会」メンバーと様子を見に訪問し、彼女なりの工夫で無理のない牛飼いを始めたことに一安心している。地域と良い関係を築いてもらいたいと願っているとともに、日本各地の農山村で混牧林放牧によるアグロフォレストリーを实践し、「こぶしの会」のような多様なメンバーが集まり交流活動が生まれてくることを切望している。

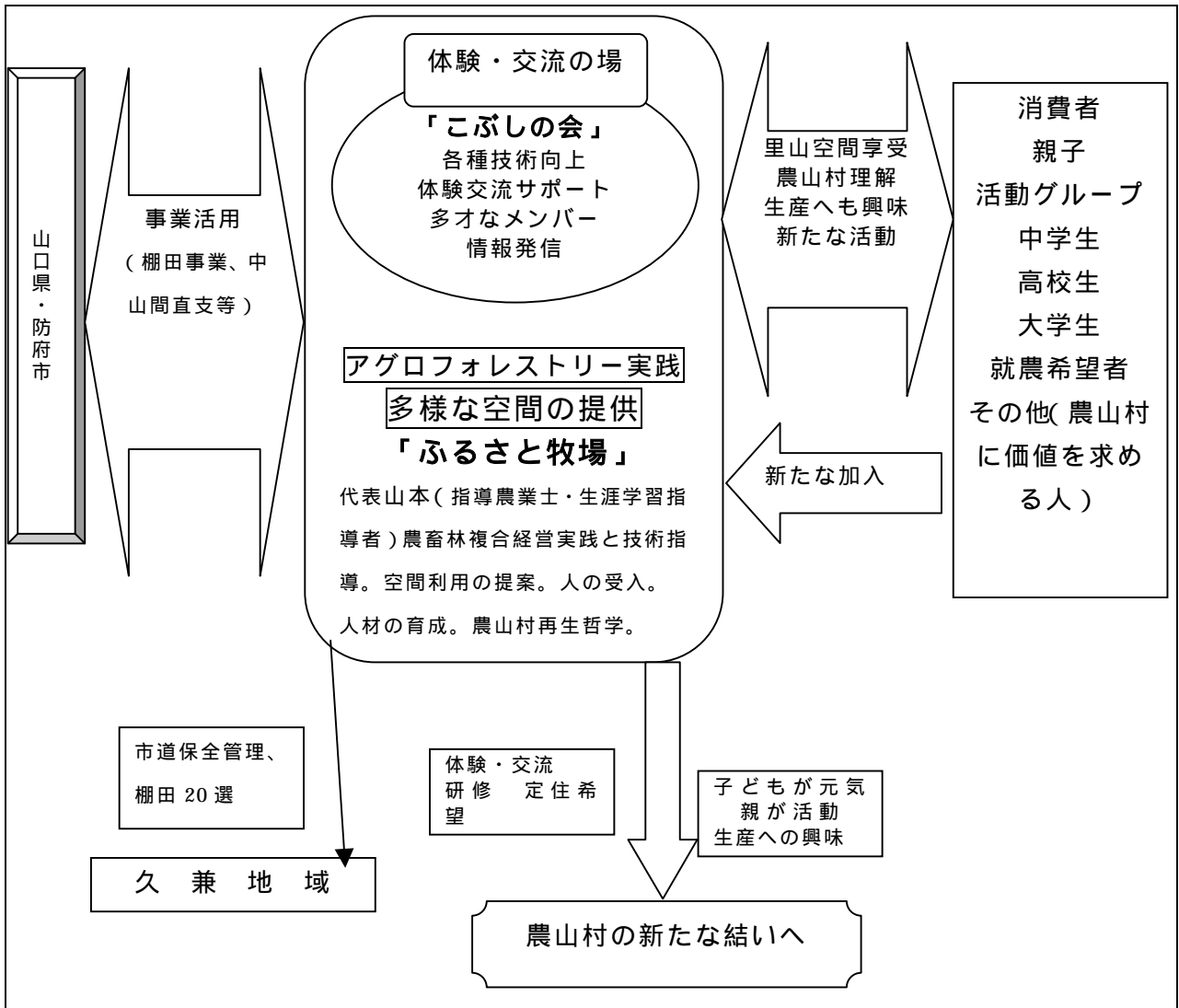


岡山で放牧を開始した会員

(4) 地域振興図 【活動内容と成果をフロー図で描画】

当該事例を中心に、各受益者（地域の人々、域内外の消費者等）に対して実施する活動内容と寄与している成果が明確になるよう図式化してください。

当該事例内の組織・体制面は必要ありません。



(5) 今後の課題 【残課題、今後の活動を発展させるために必要な事項】

久兼地域では、「ふるさと牧場」に週末車が行き来することは良く知られており、様子を見に来られた地域の方からHPを見ていると直接話しを聞くこともあるが、住民からの積極的な参加はまだ少ない。一方で、棚田が維持できないからと作業委託をしてくる高齢者もあり、ちょうど道沿いであったため、田んぼの学校の体験田とし、子どもたちが田植えをし、稲刈りをする様子を地域の方々へ見てもらえるようにしている。

この地域では、防府市街から近いこともあり、同居世帯は多いものの、農繁期には農業の手伝いはするが、親がリタイヤしたら農業を維持するかわからない世帯も多いようである。今後農業はやらないとしても、自らの所有する田んぼや山林を第三者へ任せることへの懸念やこだわりは、一朝一夕で変わるものではない。しかし、「ふるさと牧場」と「こぶしの会」が実践している活動の意味と棚田保全の価値や将来性を理解してもらえるまで粘り強くPRしていくことが必要であるとともに、「こぶしの会」そのものも棚田での生産活動を請け負える人員体制を図るため、就農希望者を受入れる長期宿泊可能な研修の場を整備することが大きな課題である。

3 当該事例の活動・成果の普及推進のポイント

(1) 普及にあたっての留意点

【当該事例の活動・取り組み内容や成果を、今後、同様の課題を抱える他地域に普及するにあたっての留意点（考慮しなければいけない点、合意形成事項、推進ポイント等）】

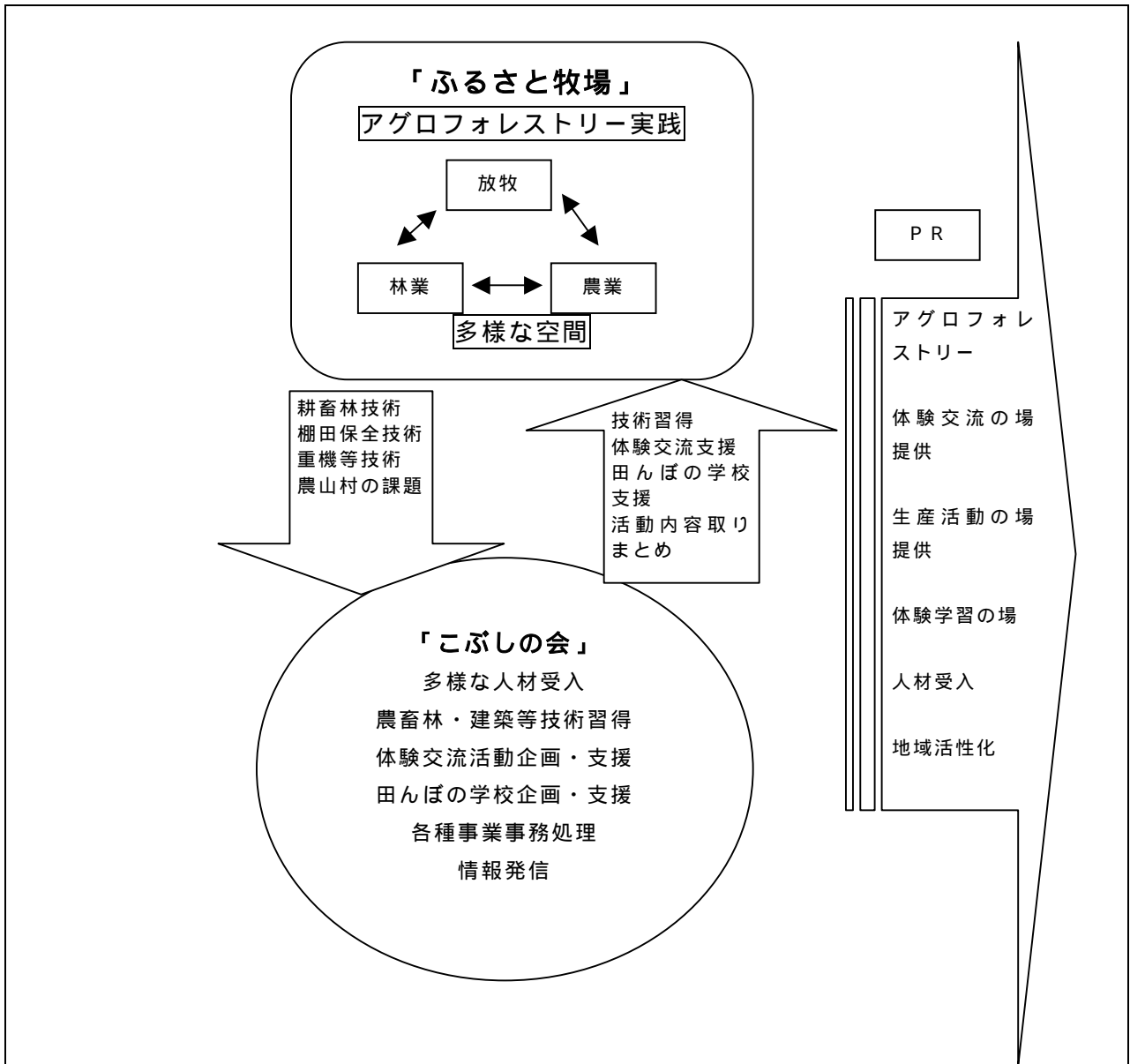
< 行政機関との連携 >

「ふるさと牧場」と「こぶしの会」の活動は、参加者数は毎回数名から数十名の活動であり、ここで出来ることを創意工夫して実践していることから、規模は小さい。活動PRも写真中心の活動紹介をHP等で公開している程度である。生産基盤がしっかりしている牧場に、農業に関心のある人だけでなく、子供を遊ばせたい親子など、いろいろな思いの人が気兼ねなく集まれる場所を作り、集まる機会を継続する中で、農林業体験だけでなく教育機関をサポートする可能性も生まれている。

農村の過疎化が進み、営農集団すらまとまらない地域もあるが、ふるさとの活性化を願う熱意ある農家が頑張って農林業を継続しているケースも多いはずである。農家だけの熱意にお任せではなく、農村が持つ多面的機能を活用した教育効果を行政レベルで理解し、農林振興の部署と教育委員会がその効果を活用するために、民間のボランティアグループ等と連携することで、有意義で広範囲の体験学習が可能である。また、行政レベルの支援があることで、第二、第三の地域活動グループが出てくることも考えられ、孤立しがちな農家（受入れる側）への意識改革にもつながる。

(2) 実施体制図

【実施主体の組織体制、他の機関・事業体とともに活動している場合は連携体制や役割分担をフロー図で描画】



必要添付資料

添付資料 1 「こぶしの会」規約、総会資料(活動報告書)
【法人、組織・グループ事例の場合は必須】

添付資料 2 「様式 B ホームページ」のデータ【必須】
ホームページデータの作成方法等は『平成 22 年度畜産大賞 = 情報提供手順書 = 』をご参照願います。

添付資料 3 活動の年次別推移【必須】

活動内容について、簡潔に年次別に整理して記述。

活動の年次別推移

年次	活動の内容	成果	課題等
H2	林業・畜産・水稲の複合経営に従事	山林 30 畝、水田(棚田) 1 畝、交雑ぬれ子牛	
H3	市場で妊娠和牛を購入 第 1 放牧牛舎建設 (間伐材利用)	和牛 6 頭で放牧開始。	
H4 ~ H9	補助事業活用の植林開始 (10 畝)	植林地放牧による下草刈 効果確認。	
H12.2 H12.8	日本草地畜産種子協会から山地畜 産展示牧場に指定。 「こぶしの里牧場交遊会」結成 茅葺き交流ハウス建築作業開始	看板とパンフレットによ り地域へ認知 茅葺き交流ハウス建築は H21 まで継続	
H13.12	防府市小学生体験学習受入	小学生と親、先生等 40 名 が参加。	
H15.12	むらまち元気交流会参加	県内各地域の活動グルー プと交流 (H19 まで参加)	
H16.3	東京農業大学学生の茅葺き体験	その他、広島大学、山口大 学学生も受入	
H17.2	環境保全型農業フォーラムで活動 報告	山口大学ホールで約 100 名参加	
H17.6	NHK 教育「ETV 特集 菅原文太長 靴の旅」で「ふるさと牧場」紹介	牛で植林地と棚田を管理 する手法を放映(全国)。	
H17.8	ふるさと探検隊 (近郊小学生) 体験 受入	防府市・山口市児童約 80 名参加	
H17.12	里山でのふれあい体験 (小学生親 子) 受入 (協会ふれあい事業)	参加者・サポーター 40 名 参加 (以降毎年受入)	
H18.5	田んぼの学校受入開始 (初蒔き、田 植え、稲刈り、餅つき)	1 組親子参加。以降毎年実 施、H22 は 11 組へ増。	
H18.9	山本代表岡山県新見市で林間放牧 講演	H20.11 会員岡田氏が新見 市で就農 (林間放牧開始)	
H19.3	広島大学生物生産学部三谷教授退 官フォーラムで取り組み紹介	広大 OB、里山と牛研究会 など約 100 名参加。	
H20.2	日本獣医師学会 (香川県) で取り組 み紹介	放牧活用分科会の和牛事 例として紹介。約 50 名参 加	
H20.3	椎茸菌打ち体験 (以降毎年実施)	会員親子 4 家族参加。	
H20.11	中畜ふれあい事業シンポジウムで 取り組み紹介 (山口市)	各県ふれあい事業担当者 等 40 名	
H21.1	茅葺きハウスに囲炉裏とピアノ設 置で完成。	活動から研修会まで受入 可能	
H21.7	防府市で豪雨災害。溪流、棚田の一 部崩壊	山本氏重機と会員により 復旧。	
H21.11	県棚田保全活動支援事業により排 水路と野外調理施設設置	材料代だけの補助事業で あり、会員で作業。	
H22.5	防府市、山陽小野田市の活動団体に 活動の場提供	「そば打ちと箸づくり体 験」「タケノコ掘り体験」	
H22.5	山口大学で「環境と地域共生」の講 義実施	1 年生約 100 名に林間放 牧、交流活動の実践を講義	

添付資料 4 補助事業等の活用状況【必須】

活動にあたり、活用した補助事業等があれば、その名称と利用目的を整理し、記述してください。

活用した補助事業等の名称	利用目的
平成3年度「山口県水田放牧事業」	72.9 m ² 、10頭規模放牧牛の牛舎建築（材料代だけの補助）
平成21年度「山口県棚田保全活動支援事業」	野外調理施設、排水路、流し台、風呂釜（材料代だけの補助）

添付資料 5 活動に対する受益者等の声（評価・意見）等【必須】

以下の様式に基づき記入、または添付して下さい。

氏名	所属・属性	声（評価）
河村京子	田んぼの学校参加者 こぶしの会	<p>平成18年の「田んぼの学校」からずっとお世話になってます。3人の子どもたち（当時小学生・幼稚園）を自然にふれさせたい、米作りの体験をさせたいという動機で仲間に入れていただきました。</p> <p>すぐに「米作り」だけではない「ふるさと牧場」の魅力に親子でひかれ、「こぶしの会」の活動にも参加させていただくことになりました。</p> <p>「ふるさと牧場」では、「自分のやりたいことを自分で責任をもってやる」ということが徹底しており、「こうしなさい」と管理されることがありません。それで、子どもたちはのびのびと自然の中で遊び、働き、自由に創作活動もしています。</p> <p>親である私も、野外で料理を作らせていただいたり、バターや絵本に出てくるケーキを子どもたちと作ったり、草木染をさせていただいたり、楽しく活動させていただいています。</p> <p>「ふるさと牧場」で出会ったお母さんたちとも、「自然の中でのびのびと子どもを遊ばせたい」という価値観が同じため、話に花が咲きます。時には悩み相談を受けたり、教育論を戦わせたり・・・</p> <p>その中で子どもたちは大きな子が小さな子の世話をしながら、徒党を組んで走り回っています。</p> <p>小学校を卒業し、高校生、中学生になった息子たちも長期休みにはふるさと牧場を訪れ、さながら小学生のごとく童心に帰って遊ぶことを楽しみにしています。</p> <p>街中で暮らしていると、味わえない「自然」をここでは堪能することができます。そしてその「自然」こそ、健やかに成長し、</p>

<p>岡田朋子</p>	<p>岡山県新見市 新規就農</p>	<p>社会の役に立つ人間になるために最も必要なものだ と確信しています。ふるさと牧場に出会って本当に幸せだと日々、子どもを見ながら感じています。</p> <p>2001年頃から「こぶしの会」を通じ「ふるさと牧場」で研修をさせていただきました。当時は広島大学の技術職員として勤務していたが、牛を利用した耕作放棄地の解消を目的とし、2008年に大学を退職後、家族4人(夫、子ども2人)で岡山県新見市に移り住み、和牛の飼育を開始した。和牛妊娠牛3頭を導入し、現在は繁殖母牛5頭、育成牛1頭を飼育している。山本氏やこぶしの会からは、牛の導入の仕方、経営方針に関する助言をいただき、大いに活用させていただきました。牛の導入は何産もしている妊娠牛を安価で仕入れ、1年以内に資金が回収できるようにした。そのため自己資金100万円を準備するだけで、無借金で生活に困ることもなかった。山林や水田の入手の方法や住まいに関することまで教えていただき、ほぼ無償で2haの土地と家を借りることができた。また経営方針として「リスク分散」を教わり、夫はサラリーマンとして働き、牛は私一人で管理している。「仕事に追われない手法」として、水田と山林に放牧しているため、1日の作業時間は5分～15分と時間に余裕がある。そのため、普段は市内の中学校で理科講師として勤務している。中学校では教科書の内容に加え、自然環境と畜産の組み合わせの可能性について話す機会がある。教科書を超えた実践的な内容に生徒たちは静かに興味深く耳を傾けてくれる。</p> <p>「ふるさと牧場」と「こぶしの会」にめぐり会えたことで、無理せず自分の生活を大事にしつつ牛飼いを実践することができたことに感謝します。</p>
<p>大野教正</p>	<p>福川こどもクラブ・代表</p>	<p>福川こどもクラブは、子供たちの「体験を通じた学び」という考えを基に、周南市福川近隣の小学生に募集をかけ、ほぼ月一回山口県内の様々な場所に出かけています。当クラブでは、平成19年から毎年1～2回ふるさと牧場を利用させて頂いています。</p> <p>最初はホームページでふるさと牧場を知り、飛び込みで子供たちの体験活動の協力をお願いしたところ、山本さんをはじめふるさと牧場にかかわっている人たちが快く引き受けてくださり、活動にも積極的に協力をしてくださいました。また、活動内容についても、こちらの意図に沿った協力をして下さったばかりか、植林や間伐、牧場の説明、放牧牛の見学など丁寧に教えて頂きました。山と、川と、町のつながり、食の流れなど、食と生活の安全は身近なところで守ってくれている人がいると知り、子供たちにとっては驚くことばかりで、学びも多くあったことと思います。</p> <p>それ以降、毎年「ふるさと牧場」にお願いし、現在に至っています。本業でご多忙なか、当クラブの水田作業、牛のお世話、山の手入れ等の体験やその他活動について、快く受入れて協力して下さる「ふるさと牧場」にはとても感謝しています。</p>
<p>森元真理</p>	<p>広島大学 大学院生物圏科学研究科</p>	<p>大学では畜産を専門として勉強していましたが、座学だけではどうしても自分の身近なものとしてこの分野を考えることができなかつたため、実際に農家さんのもとで研修させていただけないかと探していた時に三谷克之輔先生(畜産システム研究所長・広島大学名誉教授)からご紹介いただき、このふるさと牧場と巡り合いました。</p>

	<p>平成 18 年の夏期に実際に研修させていただき、「米作り」や「家畜達の世話」だけでなく除草作業のボランティアや地域のお祭りへの参加、山での花シバや栗などの収穫作業、場内用の看板作りなど、研修前には予想もしていなかった様々な経験をする事ができました。実際に研修に来るまでは「牛を田や山に放して下草刈りや堆肥の循環を上手く行っているすごい牧場がある」と聞いていたため、私の関心はひたすら牛の管理方法や山、草地などの状態にばかり向いていました。しかし、研修を通して山本さんから色々なお話をうかがい、地域の方々との交流を通して作業する中で、自分の物の見方や考え方が広がっていき、感性がとても解放されていく様な、高められていく様なとても印象的な感覚を覚えました。ふるさと牧場は確かにその農・畜・林の複合経営スタイルが斬新で先進的な中山間地農業のバイオニア的な存在なのですが、私はそれ以上に、地域の交流の場や子ども達の教育の場としての在り方にとっても魅力を感じました。特に子ども達の教育の場としての可能性にはとても期待できるのではないかと思います。</p> <p>現在、私は大学で子ども達のフィールド教育に関する研究(動物介在教育)を行っています。近年では子ども達を取り巻く環境が大きく変容し、大学生を含めた子ども達の自然体験などの体験不足が問題視されています。実際に子ども達と話していても、家畜との触れ合いや農業体験の経験は、観光牧場や一時的なイベント物での体験があるかどうかというぐらいで、多くの子が自分の食べる食物や身近な家畜の存在を資料でしか認識した事がないという現状に驚かされます。大学農場で実際の牛の大きさや日本の飼料自給率の状況を目の当たりにして驚きながら帰る子ども達を見る度に、畜産業、家畜が私たちの生活から切り離されている(食として切り離されるということはないのに)ことに不安を感じます。感性が豊かな子どもの頃に五感を刺激するような体験を畜産の現場でも実施していかないと農業を担う新たな人材は生まれにくいのではないのでしょうか。食育という点から考えても、自分が実際に知らない(目にしたことや知識が無い)ものに対して本当に有り難味を感じることは難しいと思います。</p> <p>そうした中、ふるさと牧場では「こぶしの会」による定期的な行事の開催や研修・体験学習の受け入れ、地域内や地域と都市の交流の場として沢山の子も達(もちろん大人も)に連続的な定期的な体験や学習の機会を提供していると思います。大学生の私ですら五感を十分に刺激され、食と農のつながりについて自分なりに新たな知見が得られたのですから、子ども達にはなおのことです。また、ここでは米作りと牛の管理、林業との一連のつながりを学ぶことができ、一般の畜産農家では学べない循環についても考えることができる点が素晴らしいと思いました。都市化が進む中、「子ども達に自然体験を！」と考える親は少なくない様ですが、自然体験として挙げられるものの多くが子ども達だけで体験するものや一時的なもので終わり、家に帰ってその体験を共有すべき親が共感できない、体験したり学んだりした知識の風化という問題を抱えているように思います。この点から考えても、ふるさと牧場は親子で、しかも単発的でない農業体験(例えば米の田植えから収穫までできる点など)や自然体験ができ、山本さんやふるさと牧場を訪れる様々な地域の方々から新しい知識をいただくことのできる交流の場として、とても貴重な存在になっています。</p> <p>研修を終えてから 4 年近く経ちますが、あの時学部の 3 年生だった私はふるさと牧場での実習を通して自分の感性が磨かれたのと同様に、多くの子ども達の感性や農業に対する知見が家畜との触れ合いや地域農家</p>
--	--

		<p>との交流を通して深まるようなより良い体系を何らか提案できればと思います、今も研究中です。今後も多くの子ども達(もちろん大人も)が五感で沢山の刺激を受けて感性を育むことができる場として、また農業や食育、環境教育などの親子での学びの場としてのふるさと牧場の発展にとっても期待しています。</p>
--	--	--

添付資料 6 その他成果を表す資料等【任意】

活動の成果を示すことのできる数値やグラフ

活動内容を示すパンフレット・ラベル 等

< 多様な情報発信 >

タイトル	内容
HP	
「ふるさと牧場」	http://www.d2.dion.ne.jp/~mshim/
「久兼の里」	http://www.c-able.ne.jp/~nmat-his/index.html
情報誌・雑誌（別添）	
「21世紀に向けた農業革命」山本喜行	畜産経営情報 1998.5.15 No.102
「野に在りて想うこと」山本喜行	山口県草地研究会創立30周年記念誌 H12.12
「狂牛病に負けない！ 農林畜産複合経営（上・下）」田中淳夫氏	農林経済:9429,2-6.2002年3月28日、9430,8-12.2002年4月1日
「牛を山に放牧したふるさと牧場」	（社）時事画報社「フォト」（2002年4月号）
技芸の風「牛で山を守る」	「現代林業」姉妹紙「林業新知識」（2006年9月号 No.634号）
「牛がつなく林と農」	NPO法人森づくりフォーラム「森づくりフォーラム」（2007年1月号 VOL.118）
メディア	
地域通信 H18.4、H21.1、H22.4	山口ケーブルテレビ放映
「牛飼い農家の山づくり」H17.1	（社）日本農村情報システム協会 アグリネット
「農業って気持ちイイ！」H17.3	（社）日本農村情報システム協会 アグリネット
「ETV特集 菅原文太長靴の旅」H17.6	NHK教育放送
「銭形金太郎3時間スペシャル」H19.4	テレビ朝日
「ザ・ムーブマン」H21.1	FM山口
講演	
「山地畜産実践農家ブロック研修会」	平成14年9月25日 島根県隠岐
「肉用牛振興大会」	平成16年12月16日 熊本県矢部町
「第14回環境保全型農業フォーラム」	平成17年2月20日 山口大学
「林間放牧研修会」	平成18年9月21日 岡山県新見市
「三谷教授退官フォーラム」	平成19年3月16日 広島大学生物生産学部
「日本獣医師学会」	平成20年2月10日 香川県高松市

< チラシ >

1. 「ふるさと牧場」（低投入型肉用牛展示牧場）
2. 「こりゃう米」（棚田米と「こぶしの会」のPR）